

山大聖火リレー

山形大学で学んだこと、過ごした日々、
それらはやがてさまざまな成果となって、社会に燦々と火を灯す。
現役山大学生やOBたちが各方面で活躍する姿を追った。



1 アフィニス文化財団主催の企画で、全国のオーケストラから若手奏者を集め、小規模のオーケストラを編成してコンサートが行われた。写真はリハーサル時の様子。いつもと違うメンバーとの演奏に新鮮な感動を感じる。

2 大野さんが所属している「新日本フィルハーモニー交響楽団」の貴重な集合写真。大野さんは左手後方に位置している。そうそうたる音楽家たちと肩を並べてホルンを奏でる大野さんがイメージできるのではないだろうか。

3 芸大イギリス公演の際にマンチェスターで組んだホルンセクションとの思い出の一枚。もう一人の日本人は今でも大切な友人でホルン仲間である読売交響楽団の伴野さん。大好きな音楽を通して友情や国際交流を深めている。

ホルンに魅せられプロの演奏家へ 総合大学での学びや出会いを演奏に生かしたい。

大野雄太 新日本フィルハーモニー交響楽団 ホルン奏者

高校時代、吹奏楽部の顧問の先生に「キミはホルンをやりなさい」といわれたことに始まる大野さんのホルン人生。大学進学時は教員志望だったが、3年生ごろにはプロの演奏家になりたいと考えるほどホルンに魅せられていた。大野さんが在籍していたのは音楽文化コース。教育学部とはいってもある意味で小さな音大のようなもの。それは大野さんにとって音大以上に恵まれた環境だったといえるかもしれない。小規模な音楽科のため、楽器はもちろん、合唱にも参加しオペラも歌い、モーツァルトやシューベルトのミサ曲を原語で歌った。音楽理論や音楽史も少人数の講義だったせいかしっかり身に付いた。さらに、作曲専攻等管楽器以外の学生からも刺激を受けるこ

とでさまざまなスタイルの音楽に興味があがっていった。また、大学のアマチュアサークル「山形大学吹奏楽団」には、いろいろな学部から楽器が大好きな学生ばかりが集まって一緒にやっていて本当に楽しかった。もし、初めから芸大に在籍していたら音楽が嫌いになっていたかもしれないとふり返る。

山大卒業後、大野さんは東京芸術大学音楽学部別科を経て同大学院音楽研究科修士課程(ホルン専修)を修了、現在は、新日本フィルハーモニー交響楽団に3番ホルン奏者として活動を行っている。2月には山形交響楽団の伴奏でホルン協奏曲をソリストとしてステージに立つ予定もある。さまざまな演奏家と音楽を創り上げる喜びは何も

のにも代え難いし、仕事を終えると拍手がもらえるという充実感も素晴らしい。しかし、そのためには技術面でも精神面でもつねに鍛錬を積み、体調管理にも万全を期さなければならない。「自分の芸術的な欲求を音に出すことが仕事」という幸せと辛さを同時に味わっているのだ。今後は、もっと自由に自分の音楽を表現できるように技術を磨くことはもちろん、音楽以外にも広い視野を持って演奏家としてさらに成長していきたいと抱負を語る大野さん。そして、大野さん自身がそうであったように、後輩のみなさんにも山大がさまざまな人と出会い、刺激し合える「総合大学」であることを楽しんでほしいという。人と人との出会いを大事にしていればきっといいことがあると。

修練の成果